

=====

GCOE NewsLetter

[No.54 2012/3/29]

-----

g COE 終了の辞

gCOE 講演会の要約

「テキスト布置解釈学各論」（講義科目）の要約

第 42 回オープンレクチャーの要約

=====

---

■ g COE 終了の辞

---

グローバル COE プログラムを終えるにあたっての所感  
佐藤 彰一

2007 年に開始したグローバル COE は、5 年間のプロジェクト期間を終えて  
いよいよこの 3 月末日に終了の日を迎える。「テキスト布置の解釈学的研究と  
教育」という、人文科学の軸芯をなすテーマとはいえ、その極めて抽象的で高  
踏的で、非妥協的な研究テーマをひっさげて、多様な専門分野の審査委員を相  
手にした競争資金獲得プロジェクトに臨んだのは、今にして思えば「蛮勇」で  
あった。おそらく旧プログラムの 21 世紀 COE「統合テキスト科学の構築」が垣  
間見させてくれた、新たな人文学的地平の豊穡さへの期待と興奮が、余熱とな  
って私どもの内奥にとどまり、研究推進担当者の魂に絶えず放射し続けていた  
からであったからに相違ない。これほどに大胆で先端的なプログラムは国際的  
にも稀である。そのことは、文学、歴史、哲学、言語学の海外の一流の専門家  
によって実施された、中間評価と最終評価の報告書から充分うかがうことがで  
きる。これは自画自賛との誹りを免れないかも知れない。さもあらばあれ。報  
告書の措辞のうちに、欧米の一流の学者の真の感嘆の思いも、目利きには読み  
とれるはずである。なぜ近代的なテキスト研究の伝統を持たないはずの日本か  
ら、これほど先端的な着想の人文学が現れたのか、との戸惑いさえうかがえる。

私どもはこのプロジェクトにあたって、二本の柱を立てた。ひとつはフラン  
スの文学、テキスト理論。もう一本はドイツの聖書解釈学を揺籃とし、やがて  
ハイデガーを経て、H. G. ガダマーによって人文学の一般理論と融和的な形に仕  
立て上げられた解釈学である。その理論構築には、研究担当サブ・リーダーを  
務めた松澤和宏教授の貢献が大きい。この指向的枠組を受け入れ、これを通り  
過ぎた探究者は、もはや言葉の分節によって作られたテキストを、書き手の思

考の素朴な発露と受け取ることはできない。所与のテキストの背後には、そしてテキスト作成行為の背後には、まさしく夜空を彩る満天の星がつくり出す星座のように、吸引力と磁性を帯びた夥しい数のテキスト構成要因が「布置」として明滅し、書き手を誘っている。そのことに無頓着な人文学の学徒は、もはや学問的革新に一縷の望みさえもちえないだろう。

他方で、このプログラムが研究とおなじほど教育に重点をおくことを忘れていたわけではない。教育担当サブ・リーダー釘貫亨教授のもと幾つもの新たなテキスト布置解釈学関連の講義新設し、英語による授業も実施した。その幾つかはプログラム終了後も継続される予定である。

5年の間に計13回の国際研究集会が開かれたが、内外の一流の専門家に報告を引き受けてもらい、その成果は速やかに出版された。名古屋の印刷出版社「あるむ」はその優れた他言語テキストの編集能力と、簡素ながら美しいレイアウトの造本を心がけてくれた。ニュース・レターの発行とあわせて感謝したい。加えて国際的に著名な出版社であるスプリングァー社、ピーター・ラング社や、著名な大学出版局であるMITプレス、ストラスブール大学出版局からも成果の刊行ができたことに大きな満足感を覚えている。

これら細心の予算措置が必要な企画とその円滑な遂行には、重見晋也准教授の驚くべき問題解決能力に負うところ多大である。専門の電子テキスト論での寄与とあわせて、その活躍はまことに頼もしく心強かった。プログラムの終了を期に惜しくもフランスへ帰国されるクレール・フォーヴェルグ准教授には、短い文章では書き尽くせないほど多くのご支援をいただいた。本国のみならず国際学界での一層のご活躍を期待したい。

野田ゆかりさん、安井詩歩さん、水本早奈美さんの3名の事務担当の皆さんは、万般にわたり、事業の運営の欠くべからざる潤滑油になっていただいた。一人ひとり名前を挙げることは控えるが、平野克典博士を初めとするGCOE研究員の皆さんにとり、このプログラムへの参画が、学問的に羽搏くための跳躍台になり得たことを衷心より願っている。最後になったが大学当局の財政的支援に感謝申し上げる。Last but by no means least、出版印刷会社「あるむ」の鈴木忠弘さんと、吉田玲子さんに深甚なる感謝を申し上げます。私どもの思考し議論した大多数の成果を公にするにあたって、その地方出版社としては異例の高い外国語編集と造本能力、センスがなければ、私どもの発信力は何ほどか弱いものとなったにちがいない。「あるむ」にはまさしくその原義に相応しい役割を果たして戴いた。

〈テキスト布置の解釈学〉の五年間を振り返って

松澤 和宏

〈テキスト布置〉の骨子は、拙著『生成論の探究』（2003年）のなかで、フランスのテキスト論を参考にして提示したものであったが、フォルマリズムが考察の対象から除外した前テキスト、作者、読者、コンテクストを組み込んで考察しようとしたものである。このテキスト布置の考えは、人文学におけるテキストへの方法的アプローチの素描ではあるが、それによって解釈が自ずと導き出されるような方法論でも理論体系でもない。

ガダマーの〈解釈学的経験〉という考えの裡にフランス系テキスト論の方法論偏重を超えるものがあると気づいたのは、『生成論の探究』の執筆中であった。21世紀COE「統合テキスト科学の構築」にも、方法論や一般理論の体系化への過度な期待がつきまどっていたように思われる。幸いテキスト布置の解釈学がグローバルCOEプログラムとして採択され、私は方法論主義批判という難題を抱えながら、プログラムの実施に関わることになった。『バルザック フローベール、作品の生成と解釈の問題』やパリで催された『知のテキスト化』では、フランスの研究者と時に激しい議論を交わし、『言葉に向かう日本の学知』では、時枝誠記とソシュールに解釈学的問題意識という点で相通じるものがあることを示した。また『哲学的解釈学からテキスト解釈学へ』では、ガダマー研究の第一人者のグロンダン教授の前で、テキストの二重性をめぐってささやかなガダマー批判を開陳して、有意義な意見交換ができたことなどが、個人的には懐かしく思い起こされる。

ガダマーの解釈学は主体と客体を分離する方法論主義を批判しながら、歴史的有限性を刻印された人間が、世界と自己の理解を求めて遭遇する解釈学的経験を、テキスト解釈の礎石に据えて人文学を再興しようとするものであった。解釈学的経験の核心は、方法論的対象認識ではなく、問いと答えの対話的弁証法による理解の深化にある。ある方法や理論を松明としてテキスト解釈を進める場合でも、状況に応じてその松明を消し、別の枝を折ってそれを松明としてテキストの森のなかを、対話を試みながら歩き続ける覚悟が必要である。テキストの解釈は、先人の手によって伝承されてきた価値を現在的に継承していく営みであり、伝承に参加していく主体的実践なのである。各自がみずからの領域でテキスト解釈と自覚的に取り組んだ五年間にわたる活動も、そうした解釈学的実践であったことを確認して、プログラムが蒔いた種が今後様々な形で実を結んでいくことを期待したいと思う。なお研究グループの現在的到達点については、『テキストの解釈学』（水声社）を参照していただければありがたい。

プログラム事業終了にあたって  
釘貫 亨

GCOE プログラムが終わる。個人的には先行プログラムの 21 世紀 COE 以来、10 年間これとかかわった。前半 5 年は研究プログラム、後半は教育プログラムという違いがあったが、何れにせよ自分の研究の維持と向上が死活的に重要であると腹を据えてきた。幸いであったのは、私の近世仮名遣い論研究と近現代日本語学説史が「テキスト布置の解釈学」という看板に対して違和感が無かったことである。というのは、鎌倉時代から明治前半期までの日本語学史が古典語テキスト解釈学というべき性格を備えているからである。古典古代語は、私の歴史言語学の領域でもある。今までのところは、近世の仮名遣い論書、テニヲハ学書や近現代の国語研究の高峰をたどるのに精一杯であった。しかし、これらの書に付随する同時代の注釈が広い裾野を覆うテキストの森となって解明の時を待っている。テキスト注釈の精髓として仮名遣い論書やテニヲハ書が書かれ、次いでそれらをテキストとする注釈が書かれるという解釈学の重層構造の学説史は、いま緒に就いたばかりである。緒に就いたばかりでプログラムが終了するのは残念だが、見えたのは個人の能力を超える遠大な展望であった。遠大な展望を得たところでプログラムを終了できるのは幸いである。本プログラムは博士課程の教育目標を掲げているのであるが、高等教育機関への効果的な就職を着実に実現することができた。アカデミーへの就職の困難な昨今の状況から見てこの成果は誇らしい。このことは、人文諸学の領域を横断して諸分野の博士課程の俊秀を集約して教育することの有効性を示している。本プログラムが優秀な大学院生にチャンスを与えたことは疑いない。名古屋大学の文系部局の規模から考えると、研究室選りすぐりの人材を集約的に教育する構想を模索する必要もある。本プログラムがそれに向けての水先案内の役割を果たせたとすれば、これも目標に適う成果であろう。

---

#### ■ gCOE 講演会の要約

---

2012 年 3 月 16 日 (木) 14:00~15:30、文学研究科大会議室 (使用言語 : 英語) にて

講演者 : ジャン・ガスク 教授 (パリ第 4 ソルボンヌ大学)

題目 : Egyptian hagiography and Religious History : open meaning; hidden meaning

パリ第4大学教授で、パピルス学の専門家として国際的に著名なジャン・ガスク教授が、グローバルCOEの招聘で3月14日から21日の日程で来日し、パピルス文書のみならず、氏が最近とくに関心をもち研究の対象にしている東方教会のローマ期、ポスト・ローマ期の聖人伝記録についてGCOEのメンバーと意見交換を行い、3月16日には「聖人伝と宗教史—明かされたメッセージ、隠されたメッセージ」と題する公開講演を英語で行った。

エジプトを含む後の初期ビザンツ世界の聖人伝研究は、わが国では西方ローマ世界のそれに比してやや立ち後れの感が否めない。ガスク教授はキリスト教聖人伝の東西に共通する社会経済史、歴史地理、宗教地誌などの分野での史料価値について一通り概観したあと、「聖ピオニオス伝」を素材に、旧約聖書の伝統とラジカルな訣別をしたマルキオン派の礼拝慣行の独自性を掘り下げることで、一見矛盾する記述の真の意味を解き明かしたミシェル・タルディユの卓越した業績を紹介し、ついで4世紀のエジプト殉教者フィレアスの伝記を素材にして、表面的な主題から真の主題を剔出し、また311年に殉教したアレクサンドリア主教ペテロの複数の土地の巡歴崇敬から、その遺骸の一部がそれぞれ崇敬の場所に埋葬された経緯を明らかにし、そして7世紀初頭イエルサレム主教で聖人伝作者ソフロニオスが書き記した「奇跡譚」からは、その中で語られる少年が、教会の祭壇に献納された子供であった事実を、旧約聖書のサムエルの故事を手がかりに解き明かしてみせるといふ、深い学殖に裏打ちされ、多彩な解釈学的視点をはらむ興味尽きない内容の講演をおこなった。小説という文学ジャンルの源泉の一つが、聖人伝文学であったとする議論も、まことにむべなるかなとの感を強く懐かされた。(文責 佐藤彰一)

---

## ■ 「テキスト布置解釈学各論」(講義科目)の要約

---

### 【テキスト布置解釈学各論Ⅱ】

重見晋也 (2011年12月26日、2012年1月16、23、30日)

百科全書派の示した知の分類の可能性には、知の横溢という主題が前提として存在していた。この同じ主題を20世紀のハイパーテキストの創設者たちも共有していたことを、ヴァネヴァー・ブッシュの論文"As We May Think"(1945)で確認することができる。ブッシュはこの主題に対する具体的な解決策として、従来のインデクスを使った知の分類から知の連関あるいは関係性を保存・検索するような新たな仕組みを採用した機器の開発を提案する。このテキスト自体では

なく関係性の全体を重視する考え方は、百科全書派の系譜に属する理念だと考えることもできるだろう。

テキスト自体にではなく、テキスト間の関係性を重視するという観点は、フランスの批評家ジェラルド・ジュネットが『パランプセスト』(1982)の冒頭において提示した「超テキスト性」の考え方でもあった。ジュネットが主張する概念では、本来的にはメタ・テキストやパラ・テキストといったような個別のテキストの性質ではなく、テキスト間を結ぶ関係性である。

このようにテキスト間の関係性を「布置」としてとらえるのであれば、ミシェル・フーコーが『知の考古学』(1969)で提示した「言説」概念もまた、「言表」を対象・様態・概念・戦術という4つの審級それぞれにおいて発動するフォーメーション・ルールによって統一性が保証された、一つの全体としての知という「布置」として考えられている。フーコーが提示するこの布置は、中心をもたずお互いの関係性の記述によって絶えず分散していく全体として提示される。このように「布置」とは個々のテキストによって構成されるものとしてとらえるのではなく、テキスト間の関係性によって構築される全体であるが、ジュネットにせよフーコーにせよその性質は静的で変化が生じる余地のない一つの全体として想定されている。しかし、解釈者によって解釈が変化するのであれば、「布置」もまた動的に変化する可能性をもたねばならないのであり、ここにこそ解釈学とテキスト布置とを結ぶ次元が現れてくるのである。

---

## ■ 第42回オープンレクチャーの要約

---

2011年11月30日(水)18:00～ 名古屋国際センタービル15階グローバルCOE  
オフィスにて

講演者：松澤 和宏 教授 (名古屋大学大学院文学研究科・フランス文学)

題目：「言語とテキストの解釈学」

解釈学的理解の第一の特徴として挙げられることは、対象の裡に自分を移し入れて追体験的に理解しよう努めるという姿勢である。小林秀雄が挙げる亡くなった子供を思い起こす母親という有名な例が如実に示しているように、歴史をかけがえのない思い出として捉えようとするのは、ディルタイの解釈学的理解と重なる主体的な把握である。小林秀雄に見られる客観主義的な方法論主義への批判は、言語とテキストをコミュニケーションの手段や自律的存在としてではなく、解釈学的経験の場として捉えようとする点で今日でもなお評価に

十分値するが、解釈者の現在と過去との二重性を立体的に捉えるには至っていない。ガダマーの哲学的解釈学は、テキスト解釈が起源の文脈と解釈者の背負っている文脈との間の対話という観点を導入したが、テキストを起源の文脈に還元してしまっているために、媒介者としてのテキストの独自の境地(エレメント)が十分には究明されていないように思われる。テキストの二重性を、文学的文献学や法解釈学と歴史学との間に存在する差異に注目しながら考察し、歴史学が過去の客観主義的復元を目指すように見えながらも、最終的には解釈対象と解釈主体との連続性、同質性が想定されていることを、ガダマーの論述に即しながら明らかにした。そしてテキスト解釈の一例としてフローベール『感情教育』の一節の解釈を試み、最後に解釈学的なテキスト経験が個人を超えた伝承の共同体に参加する実践でもあるとするガダマーの伝承の共同体論の意義と問題点を考察した。

---

GCOE 「テキスト布置の解釈学的研究と教育」

Hermeneutic Study and Education of Textual Configuration

<http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/>

---

NewsLetter No.54

発行：GCOE 編集部

編集担当：平野克典

Copyright(C) 2012 NAGOYA UNIVERSITY, GRADUATE SCHOOL OF LETTERS

---